

むかし、あるところに、たいへんななまけ者がいました。自分の食べる物さえ手にいれるのがおつくうで、毎日寝てばかりいました。屋根はもるし、壁はくずれ落ちるし、部屋のあちこちに草が生えました。それでも、いっこうに働く気になれませんでした。それで、おかみさんも子どもを連れて出て行つてしまいました。

ある日のこと、なまけ者が、いつものようにごろごろ寝ていると、手のひらに乗るほどの、豆まめのように小さいやせた男がやつて来ました。男は、

「ここはなまけ者の家だと聞いてきたが、ぜひこの家に置いてくれ」といいました。なまけ者が、

「置くも置かんも、かみさんも子どもも逃げ出すありさまで、食べる物も飲む物もない。とても人を置いてやることはできん」というと、男は、

「いや、おれは、そういうなまけ者の貧乏人が大好きだ。それで、わざわざおまえをたずねて来たんだから、どうでも置いてもらうつもりだ」といつてききません。なまけ者はあきれて、

「それじゃ、入れ」といつて、男を家の中に入れてやりました。

なまけ者と男は、ふたりして、毎日ごろごろ、ごろごろ寝てばかりいました。するとそのうち、小さな男が、むくむく太りだしました。そして、太るとも、太るとも、しみに部屋いっぱいにながって、なまけ者は、部屋のすみにぎゅうと押しつけられてしまいました。寝る場所ありません。なまけ者もこれにはこまって、

「おまえは、来たときはあんなに小さいやせっぽっちだったのに、いったいこれはどういうわけだ」とききました。すると、男はにこにこしていいました。

「じつは、おれは、なまけ神だ。ここへ来る前は、たいへん働きの金持ちのところにしたから、あんなにやせて小さくなってしまつてたんだ。ほんとうに、ひどい目にあつたよ。ところが、おまえのところに来てからは、おまえがなまけてばかりいてくれるから、おれもこんなに太ることができた。たいへんありがたい」

そのうち、なまけ神はいよいよ太つて、しまいにはなまけ者を家の外へ押し出してしまいました。

なまけ者は、いる所がなくなつたので、どこかで泊めてもらうほかありません。それ

にはお金がいるので、しかたなく、すこしだけ人の手伝い^{てっだ}をして働くようになりました。働いてみると、わずかでもお金がもらえるし、ご飯も食べられるし、人に喜んでもらえるし、そんなにいやでもなくなりました。なまけ者は、だんだんよく働くようになりました。

ある晩、なまけ者が自分の家に帰ってみると、なまけ神が、前よりずっとやせて泣^ないていました。そして、

「おいおい、おまえ、働くなんてつまらないことはやめろ。それよりおれを助けてくれ」といいました。なまけ者は、

「いや、おれは、働くことがおもしろくなってきた」といって、それから、ますます一生懸命働^{いっしょうけんめい}きました。すると、なまけ神は、日ごとにずんずんやせ細^こって、しまいにはまたもつのように、豆のように小さくなつてしまいました。そして、

「これではとてもいられない」といって、とうとうある日、逃げ出していきました。

なまけ者は、もう、なまけ者ではなくなつて、家も建て直してりっぱに働くようになりました。そして、おかみさんも子どももよびもどして、幸せに暮^くらしましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『甲斐昔話集』土橋里木／郷土研究社